

# インドネシア・ニアス島の祖先像アドウ

賈 鍾 壽

(就実大学教授)

## はじめに

インドネシア・スマトラ島北西部の海岸から140km離れたインド洋上の赤道付近に Tanö Niha がある<sup>(注1)</sup>。この島は、今も巨石文化が生き続けている「神秘の島」として知られている。ニアス人はオーストロネシア語族に属し、特有の言語や習慣を持っている。民族学的にニアス人は、バタック人、トラジャ人、ダヤック人など原マレー人との親縁性が高い。しかし、ニアス人は、隣接するバタック人との関係が一番濃厚であり、両者には生活文化、習慣、社会組織、宗教体系などの多くの共通点がある。

ニアス島にはいくつかの部族連合国 (Ori、あるいは Negeri) があり、その下にいくつかの村の連合体 Banua があった。ニアス語で「バヌア」とは土地、村、領域、中心、王国、そして世界や宇宙を意味する多義的言葉である。バタック語とトラジャ語の Banua、ブキス語とミナハナ語の

Wanua、フィリピン南部のミンダナオ語の Banwa、マレー語の Benua、ポリネシア語の Enoa、フィジー語の Vanua は、全て同じ意味で過去のオーストロネシア語族の拡散を示唆している<sup>(注2)</sup>。

ニアスは Tuha (首長) を代表とする貴族、神官、平民、

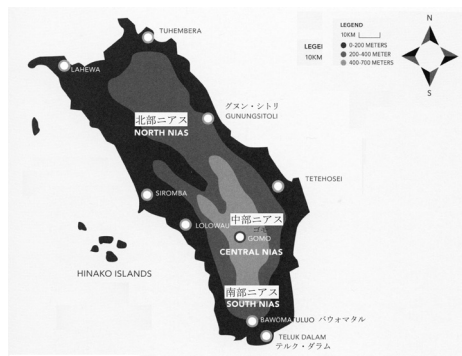


図1 ニアス島の地図

奴隷などの階層がある。首長の末裔の貴族は Siulu（川の上流にある人）と呼ぶ<sup>(注3)</sup>。男性神官 Ele と女性の神官 Ele Ila Arawe は貴族と平民の仲介者としての役割を担っている。平民は Banua Sato、Ono Mbanua と呼ぶ。

ニアス島の古い歴史はほとんど知られていない。グヌン・シトリから約12000年前の岩陰遺跡（Goa Togi Ndrawa）が発掘され、また、ムゾイ川（Sungai Muzoi）沿いの新石器時代の遺跡からは磨製石器が発見されている<sup>(注4)</sup>。これらの遺跡から出土した石器をメダンの北スマトラ州考古学研究所のケトゥ・ウィラディアナ（Ketut Wiradyana）は、紀元前10000年頃の東南アジア大陸部のホアビン文化の系統を引くものと論じている。

ニアス人の起源神話は、6つの神が天上界から地上に降りてきてゴモ川流域の Sifalago の高原地帯に定着したと伝わる。ニアスの最初の村は Boro Nadu で、ニアス人の祖先は Gomo と Alamo から Maenamölö、Tölamaera へ拡散したという<sup>(注5)</sup>。

このような伝承と関連して、最近ゴモの Tundrumbaho 村で埋葬遺跡が発見された。ジャングルの中の巨石広場にはメンヒル、ドルメン、石棺、Osaosa（頭と尾が3つの Osaosa Si Tolu Mbogi、頭と尾が1つの Osaosai Sara Mbogi）、Gowe Nilare、石像など、多くの石造遺物が残っている<sup>(注6)</sup>。また遺跡の近くには、ススア川とジャヌタエ川が流れ、また、L ahusa Satua にも多様な石造遺物が残っている。



図2 オサオサ、ゴウェ・ニラレ、立石  
（トゥンドゥルンバホ遺跡）

本稿は1991年8月、2016年8月、2017年2月の3度にわたって筆者がニアス島で行った現地調査に基づいて、ニアス島における祖先像 Adu の全貌を紹介し、その始原を探る。

## I. 今も生きるニアス島の巨石文化

南部ニアスの Bawomataruo 村は巨石広場を中心に T 字型に家屋が並んでいる。1863年にオランダ軍は、南ニアスの中核村 Orahili の Omo Sebua（首長の家）に火をつけて全焼させた。その後、Raowo Siduhu 王と村人は、オランダ軍が全焼させた旧村を見下ろせる丘のすぐ上に、新しい村を作り始めた。

村人は、最初に Batu（石）・Banua（村、国、世界、宇宙の中心）を交差点の一角に建てた。そして広場の真ん中に Huso Newari（臍石）を造った<sup>(註7)</sup>。この2つの巨石記念物は、村と宇宙の中心を象徴する。バトゥ・バヌアの前の広場に、石台跳びの儀式（Fahombo）のための石積みの跳躍台（高さ 2 m、幅 70cm）が築かれている。ニアスの人々は巨石記念物の配置、居住の配置と形態などの全てに宇宙論が立脚した社会的地位を表している。

1878年、再び巨大なオモ・セブアと Omo Bale<sup>(註8)</sup>が完成した。オモ・セブアは大路の交差点の中央、すなわちバトゥ・バヌアとフソ・ネワリの近くに、村全体を見下ろすように大きく建設された。オーストロネシア語族は、南北の方位軸を持たず、川の上流と下流、山と海のような地形に沿って東西を方位とする。南部ニアスでは、Raya（上流・山）と Lou（下流・海）が村の基本軸線となる。しかし、バウォマタルオ村は道に沿って両端の入口を基本軸に形成し、オモ・セブアは Atumbukha（太陽がのぼる方向）に向けて建てられた。またバトゥ・バヌアの前にはオモ・バレが建立



図3 バウォマタルオ村のオモ・セブア  
（1991年、賈撮影）

された。村の中心部近くには、規模の大きい Omo Hada（貴族の家）、その外側に規模が小さい Omo Pasisir（平民の家）が立ち並んでいる。

その後、首長や貴族の家の前に様々な巨石記念物が築造



図4 オモ・セプア前の巨石記念物  
(1991年、賈撮影)

された。ニアスの巨石記念物は、特に首長と貴族が祖先崇拜と関連して、葬儀や各々の身分と地位を誇示するために様々なものが建てられた。パウオマタルオ村のオモ・セプアの前には Daro Daro (ドルメン) がある。右側のドル

メンは村の創設者 Saonigeho 王を記念するものであり、1881年に築造された。左側のドルメンは、1914～1915年に築造された最後の王サホニゲホのものである。

ドルメンはまず良質の石を選び、石を切り出す。切り出した石をV字型の修羅(轎のような運搬具)に乗せ、籐のロープで石材と修羅を結び、その下に丸太を敷き、修羅を引く。村人が二手に分かれ、ロープを引っ張りながら村まで移動する。パウオマタルオ村は急傾斜の丘の上にあるため、採石場から石材を村まで運ぶのに515名の村人で3日もかかった。石が村まで運ばれると盛大な Owasa (勲功祭宴) が開催され、ドルメン完成後に様々な儀礼が行われた。このような巨石記念物の築造を伴うオワサは現

在も行われ続けている<sup>(注9)</sup>。

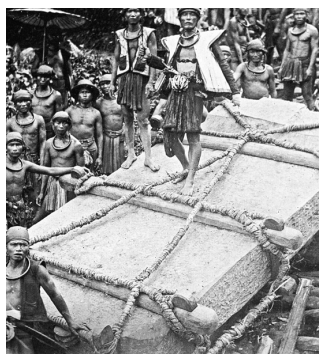


図5 巨石運搬 (パウオマタルオ村、1915年、インドネシア国立考古学研究所提供)



図6 巨石運搬 (Orahili Fau、2014年、Hikmat Zagoto 撮影)

オワサは武装した二人の戦士が護衛する少女たちの歌と踊りから始まる。その後、槍と盾で武装した数百人の激しい Maena Baluse（戦士の歌と踊り）があり、神懸かりの神官の歌と踊りが続く。戦士の歌と踊りは、悪霊を追いかつためのものであり、神官の歌と踊りは祖先と交信し、村の安寧を祈願するものでもある。一連の歌と踊りが終わると、戦士たちが広場の中央に集まって、王の家のある Hombo Batu（跳躍台）を順番に



図7 戦士の踊り（バウォマタルオ村、1991年、賈撮影）



図8 男女の神官の踊り（1991年、賈撮影）



図9 Fahombe 儀礼（1991年、賈撮影）

次々飛び越えていく（Fahombe 儀礼）。

1878年、バウォマタルオ村の建設後、村人は新しく建設された村を浄化するために首狩りを行い、盛大なオワサを開催した。この新しい村は「太陽が昇る丘」（Bawomataruo）という名前で、今日に至っている。

筆者はプサカ・ニアス博物館と合同で、2016年に Tete・Gowe 遺跡、2017年にトゥンドゥルンバホ遺跡の地表調査を行った。これらの遺跡は、川が流れる景色のよい高い丘の上に位置している祭祀・埋蔵遺跡である。幅 6



～7m、長さ40～50mの長方形の石が敷かれた巨石広場の中に、メンヒル、ドルメン、Niogali（高さ70～80cm、直径110～120cm）、石像、オサオサなどが配置されている<sup>(注10)</sup>。



図10 トゥンドゥルンバホ遺跡の入口



図11 テテ・ゴウエ遺跡の全景



図12 首長の祖先像ベフ  
(Behu、ゴモ遺跡出土)

テテ・ゴウエ遺跡の支石墓の下部の石室から土器の中に納めた人骨が発見された。また、首長の特別な祖先像 Behu が建てられている。立石の表面に手足を省略し、陰茎と膨らんだ胸、首飾り(Nafato Fato)をしており、頭の上には、顔の代わりに別個作りのオサオサが乗せられている。この石像は、首長一族の創設者の象徴として全ての土着の神々（パンテオン）を称えるために立てられた。

ニアスの首狩り風習は、19世紀初頭まで続いた。首狩りには、豊作や豊かさを祈願し、首長の来世での奴隷を確保し、戦功を証明したり、神意を占ったり、そして村を浄化して安寧を祈るためなど、様々な理由があった。1878年にバウォマタルオ村のオモ・セブアとオモ・バレを完成した時、アラモから7人の首を狩り、Lature Dano（地下界の神）と Lowalangi（天上界の神）に捧げたという。7つの頭蓋骨のうち3つは、村の入口の階段の上と下に埋め、1つは村の中心にある「臍石」の下に埋めた<sup>(注11)</sup>。

プサカ・ニアス博物館に首狩りと関連する Adu Siraha Horo が展示されている。この木像は、頭に被った冠の上に天上界の神（ロワランギ神）



図13 アドゥ・シラハ・ホロ  
(プサカ・ニ阿斯博物館)

との関係を描写するため、頭に2つの長い角を持っている。この頭の上の「V」字型の角の間にある Adu Zanoloko は、首狩りの前に戦士の安全と成功を祈った像である。そして首狩りから戻ってきた時、戦士たちはアドゥ・シラハ・ホロに背中を擦りながら、犯した罪の許しを請いた。この浄化儀礼の後にのみ、戦士が不幸なく家族のもとへ戻って行くことができた。

## II. 祖先像アドゥ

ニ阿斯造形美術の特徴を最もよく表すのが Adu である。アドゥは人間の姿を彫刻した宗教的な目的で造った祖先像であり、儀礼の際に祈願の対象とした多様な祖先神を形象化したものである。したがって、その形態は、地域、階層、礼儀の内容に応じて様々なものがある。アドゥを「貴族が使用したもので、出産、結婚、死、裁判、治癒などの儀礼に関連する特定の目的のために作られた」<sup>(注12)</sup> という指摘もあるが、アドゥは必ずしも貴族のみが特定の目的のために限定的に使われたものではない。

ニ阿斯人における祖先は、生きている子孫に対して全知全能な神である。ニ阿斯人における祖先の重要性は、アドゥによって容易に把握できる。例



図14 アドゥ (19世紀初頭)

えば、祖先は子孫の幸福と繁栄を維持させる力を持つ存在で、特に首長のアドゥは「椅子に座り、Adat (慣習法) を語る」という。祖先はアドゥに宿り、子孫たちと共にすると信じられている。すなわち、アドゥの超自然的な力によって子孫たちは権力と権威を得ることになる。

ニアスでは有力な貴族が死ぬと Adu Zatua（男神像）と Adu Nuwu（女神像）を作り、家の中の壁（Tawolo、前室＝公的空間）に Laso Hagu（祭壇）を設けて安置した。アドゥ・ジャトゥアは彫刻的に素晴らしく、ニアス造形美術の白眉といえる。ニアス人はアドゥは家族と一族の運命に多大な影響を与えると信じている。また、祖先が子孫の安寧を保護し、アドゥに供物を捧げる行為は、祖先神を喜ばせることだと考えている。そして儀礼や首狩りのような慣習法を遵守することにより、社会の継続的な繁栄を確保できると考えている。全ての通過儀礼と収穫儀礼はアドゥの前で行われる。



図15 ラソ・ハグに安置されているアドゥ・ジャトゥア（南部ニアス）



図16 アドゥ・ジャトゥア（中部ニアス）



図17 アドゥ・ヌウ（南部ニアス、北スマトラ州博物館）

子孫はこの祭壇に供え物を用意し、祖先像に重大事を決定する神意を聞き、出産、結婚などの家族の一大事を報告し、日常生活の様々な願いを祈願する。アドゥ・ジャトゥアの中で、特に身分が高い首長クラスの祖先像は Adu Siraha Sawala と呼ぶ。アドゥ・シラハ・サワラは、天上界と現世をつなぐ仲介者であり、子孫の安寧と繁栄を保護する最も強力な守護神でもある。ニアス人は偉大な祖先の靈魂が社会の秩序、家族の幸福と安全、農作物の豊作、家畜の繁殖などを支配して維持すると信じている。

天上界の神と下界の神のアドゥを彫刻する木は、神聖なものとなされた。アドゥの彫刻家たちは、祖先個人の身体的特徴ではなく、大きな冠飾



りと首飾り、ビンロウの実を入れた皿、耳飾りなど、装飾品を用いて身分が高い首長と貴族を象徴的に表現した。特にワラビ形の大きな王冠は、権力の象徴として、首長家の中で最も神聖な場所に保管されている。

アドゥ・ジャトゥアは大きな Ni'otalinga Woli-Woli（金冠、生命の木を象徴する）を被り、小さな楕円形の目、平らで大きな鼻、小さな口、丸い耳、葉の形の長い耳飾り（Sialu＝男女の金製の耳飾り）、丸くて太い首飾り（Kalabubu＝戦士用の木製首飾り、Nifatali-tali＝貴族用の金製の首飾り）、直立した男根などが特徴である<sup>(注13)</sup>。

北部と中部ニアスでは、階層に関係なく死んだ幼児や死産を含む死を追悼するために小型アドゥを作って家に安置する。ニアスでは、両性の双子の出生は不吉な前兆（母胎の中で近親相姦を犯した）と信じ、双子が出生した場合は2つの頭を持つアドゥを制作し、今後起こる災害を防止する。両性双子誕生のタブーは両親が盛大な浄化儀礼に加え、兄弟のいずれかを殺害し、贖罪儀礼を挙行しなければならなかった。

座っているアドゥは王族や高位貴族 salaha を表している。アドゥ・シラハ・シラハは「最も高い保護聖霊の祖先」として、家のもっとも大きい



図18 アドゥ・シラハ・サワラ（北部ニアス）

部屋の独立柱に特別な祭壇を設けて安置している。北部ニアスのアドゥ・シラハ・シラハは家族を保護する高貴な祖先、村や一族の創始者を示す。三角形の冠（Saembu Ana'a）、首飾り、耳飾り、ビンロウの実を入れる皿などは、全て身分の高い貴族層の男性を象徴的に表す装飾品である。北ニアスのアドゥは、特有の大きな三角形の冠の形、太い手足や供物を受け取るための容器を持っている手などを見て識別できる。

中部ニアスのアドゥ・ジャトゥアは顔や手足に量感があり、幾何学的な文様を施している。膝関節の前を丸く処理し、3つの高い角を持つ冠、顔の中央の広い三角形の大きな鼻、耳飾りと首飾り

装飾などは、彫刻自らが高い身分をそのまま示している。中部ニアスのアドゥはほとんど男性の像であるが、一部女性、あるいは男性と女性の両性具の像もある。貴族は、特別な祭壇を作り、平民は壁に纏めて立てている。

頭に長い角の形の冠を被ったアドゥ・シラハは、病気や悪霊、Bekhu<sup>(注14)</sup> から保護するために作られたものであり、大きく印象的な木像は最高位の首長を表現している。守護神シラハは、しばしば男性と女性の特徴を組み合わせた形で彫刻されている。大きな乳房は寛容と豊かさを象徴するもので、この像は母親のような優しさを表している。様々な形態のアドゥ・シラハは諸々の病気を予防するために制作された。アドゥ・シラハは守護神の役割だけではなく、貴族が自分の地位を高めるために開催する祭宴（Fondrako）のためにも作られた。また、フォンドゥラコは慣習法と宇宙のバランスを再確認する一種の勲功祭宴で、過去の罪を贖罪するために7年ごとに開催される更新礼儀でもある。

Adu Horo は2つの高い角を持つニアス最大の木像である。アドゥ・ホロは、特定の祖先を彫刻したものではなく、祖先に罪の許しを得るため



図19 アドゥ・ホロ（中部ニアス、インドネシア国立博物館）

に作った儀礼用の像である。深刻な病気や不幸は祖先代々の慣習法を犯して発生するものと信じて、何らかの不幸や問題が発生したときにアドゥ・ホロを家の前に安置し、罪の許しのための供物を捧げた。中部ニアスのアドゥ・ホロは角のような長い冠の飾りが付き、両腕が大胆に省略され、直立した陰茎と膨らんだ乳房が目立つ。大きな王冠と首飾りは、像が貴族の罪を贖うときに使用された可能性があることを示している。1980年代までフォンドゥラコの礼儀では、神官がアドゥ・ホロと同様の冠を被っていた。

南部ニアスのアドゥは、この地域固有の多様な彫刻様式が確認されている。北部と東部のものよりは、比較的自然な人間の形を彫刻したのが南部

ニアスのアドゥの特徴である。村の首長は通常、片手に皿、もう片方の手にはビンロウの実が入っている袋を持って座っている姿で彫刻された。像はオランダの商人から入手した赤い布に包まれている。ワラビの形の大きな王冠が特徴であり、人体の過剰的な強調がなく写実的に表現されている。座像アドゥ・ジャトゥアは金の首飾り、戦士の立像は戦士用の首飾り、木の葉の形の長い金の耳飾りを身に着けている。一般的に座っているアドゥ



図20 アドゥ・ソ・バワ・ジホノ（インドネシア国立博物館）

は、社会的に地位が高い首長や貴族を示し、槍と盾を持っているものは戦士像である。

筆者が確認したニアスのアドゥは約60種類あり、その中で最も大きな木像が Aduso bawazihono（千の顔を持つ像）である。インドネシア国立博物館所蔵のアドゥ・ソ・バワ・ジホノ像（高さ202×幅36.8×厚さ19cm）はV字型の高い冠飾り、大胆に省略した両腕、直立した陰茎が特徴である。この像は首狩りと関連するものであり、巨大な陰茎は戦士が社会的責任である首狩りに成功すること、農作物や家畜の繁殖を祈願するものである。

青年たちが戦士として首狩りの義務を果たしていない場合は、地域社会に不幸が起こればと考えられていた。



図21 カジア・アドゥ（プサカ・ニアス博物館）

プサカ・ニアス博物館所蔵のアドゥの中には、大きなアドゥを中心に左右に、小さなアドゥを配置した Kazia Adu がある。この像は偉大な祖先とその息子たちである。U字型の冠飾りにも3つのアドゥが彫刻されている。カジア・アドゥは勇敢な戦士を表したものであり、たくましい男の子の誕生をつかさどる祖先像であった。このような祈り信仰と関連する貴族の女性の神像を Adu Sarambia、あるいは Adu Niu と呼ぶ。この像

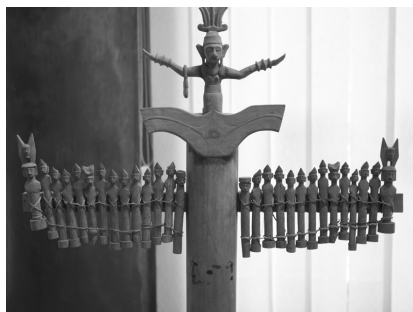


図22 アドゥ・サランビア（プサカ・ニアス博物館）

は Mina Banua（村人の母）と呼ばれ、あらゆる儀礼（Fa'ulu / Owasa）に招待され、子孫の繁栄を守ってくれると信じられている。

南部ニアスは単独のアドゥ・ジャトゥアだけでなく、壁に立体的に彫刻し、祭壇に祖先神を安置したオモ・セブアがある。このよう

な祭壇は、首長の家の中で最も神聖な部屋の壁に設けられ、その形態は傘の下に椅子を彫刻し、小型アドゥ・ジャトゥアを安置している。椅子の両側には生命の木（Tolata）が浮彫されている。また、祭壇とアドゥ・ジャトゥアを浮彫に刻まれたものもある。浮彫した壁の祭壇には、様々な神話上の主題が刻まれている。一番上の部分に金製の櫛、その下には魂を運ぶ



図23 祭壇とアドゥ・ジャトゥアの浮彫（プサカ・ニアス博物館）

船、その中には2つの生命の木、その間にダロ・ダロ、アドゥ・ジャトゥア、そして船の下には葉の形の長い耳飾りと首飾りが刻まれている。生命の木、魂を運ぶ船、ドルメン、アドゥを壁に彫刻している。このような浮彫の左右にもニアス神話に出てくるワニとサルの像が配置されている。ワニ（ラトゥレ・ダノ神の化身）は首長のみが使用できる文様である。

ニアスの南東バトゥ諸島の島民の大半は南ニアスからの移住者たちである。バトゥ諸島のアドゥは腕がない円筒形の肩が特徴であり、全体的に南ニアスの戦士像と類似している。3つの角の形の冠飾り、金製の耳飾りと首飾りなどは貴族層を表している。しかし、これらの人物像は、村の首長や氏族の創始者ではなく、最も重要な親族で

ある Adu Nuwu（母方の叔父）である。アドゥ・ヌウは、ニアス社会の母系社会との関連性を示唆する重要な資料である。

アドゥは特定の家族だけでなく、氏族や村全体の守護神でもある。村全体を守護する神々を Be'elo Banua といい、この像はオモ・バレに安置している。アドゥは超自然的な力があると信じられており、造形上非常に抽象的で力強く表現している。アドゥとは別の方法で病気を治療するために非常に粗雑にした Behero という偶像がある。魔術師がこの偶像を使用して病人の魂を迎えに来る悪霊を追い出し、聖霊を呼び込むものである。また、出産を司るアドゥは Tendoloruruo と呼び、これはロワランギ神の分身だという。

### Ⅲ. ニアス島の石像

メンヒルとドルメンはインドネシア諸島で最も広く分布しているが、そのほとんどが祖先信仰と関連する墳墓あるいは記念物である<sup>(注15)</sup>。大きなドルメンは Neogadi、小さいものは Neodulo と呼ばれ、儀礼用テーブルの機能を持つ。ネオガディは首長や貴族の結婚式のときに使用され、新郎は新婦のためにネオドゥロを築造し、盛大なオワサを開催する。ニアス島のドルメンは死んだ首長の葬儀、新しい首長の即位式、結婚式など一連の儀礼過程で作られたものであり、多様な機能を持っている。

ゴモ遺跡のドルメンからは2次葬の遺骨が発見されており、ニアスのドルメンが本来墳墓であることは明らかである。ニアス島のドルメンは、本来墳墓として機能していたものが、18世紀以降は首長の記念碑として築造されている。また、ニアスではドルメンとメンヒルが一緒に建てられており、メンヒルは男性の祖先、ドルメンは女性の祖先を示すという<sup>(注16)</sup>。

ニアス島の各村にはよく加工された石の椅子が村の広場にあり、一人用の単独形と複数のベンチ形がある。前者は王が儀礼に使用するもので、後者は慣習に従って、一定の儀礼を行う有力な平民が自分の家の前に建てており、普段は座って休む椅子として使用する。ニアス島のオサオサはかつ



図24 木製のオサオサ  
(北スマトラ州博物館)



図25 石製のオサオサ  
(男性用、ラフサ・サトゥア遺跡)

て礼儀の際、主催者（首長や貴族）が座る椅子であった。3つの頭を持つものは男性用、1つの頭を持つものは女性用である。南部のニアスでは貴族の死体を運ぶために使用された。

今までアドゥは主に木像を中心に報告されているが、最近、南・西ニ

アスで相次いで石像が発見されている。その中の大型石像はグヌン・シトリ近くの Ono Waembo Idano、西部ニアスのマンドゥレへの Hiligoe 遺跡（最大の石像、高さ300×幅90×厚さ80cm）、



図26 座っている石像  
(ヒリ・ゴウェ遺跡)



図28 メンヒル形石像  
(トゥヘムベルア遺跡)



図27 メンヒル形石像  
(ヒリ・ゴウェ遺跡)



Halaman 遺跡、マンドゥレへの Sisarahili 遺跡、Tuhemberua 遺跡などがある。

南ニアス州フルナ郡 Bihata 村のジャングルの中には、ドルメンと石像群が2ヶ所残っている。村の近くの道路から南に約400m 離れたジャングルの中に6体の石像と13基の立石、8基のドルメンが立ち並んでいる。

8体の石像は木製のアドゥと同じ形式で、典型的なメンヒル形石像である。ニアスの石像は、1つの花崗岩を彫って作られている。頭には突起した大きな冠、イチョウ形の目、平らで大きな鼻、丸い耳飾り、円形の首飾り、勃起した陰茎など、全ての木像にも共通するところがある。しかし、8体の石像の装飾などの詳細様式は大きく2つの形態に分類できる。



図29 第1石像群（ビハタ村）

第1形態の石像は、中央に位置する2つの石像であり、比較的写実的に身体を表現している。東の石像（高さ135cm、幅58cm）は台石（高さ60cm）の上に両足を曲げた姿、すなわち椅子に座っている姿をしている。西の石像（高さ168cm、幅59cm）は地面の上で膝を折って座っている。頭には周囲に突起がついた王冠を被り、手足が彫刻されている。この2つ

の石像が遺跡の中心的な存在である。特に椅子に座っている石像は首長、その隣で膝を折って座っている石像は臣下を表している。

第2形態は、立石のように表面をよく整え、人面と高い冠を彫刻し、大胆に手と足を省略した石像である。大きな突起が付いている冠、口、下半身の彫刻がないのが特徴であり、中心にある石像は首長、その他石像は首長を補佐していた臣下を表現したものと推定される。その中には未完成のものと思われるほどに冠、顔、首飾り、胴体、陰茎だけを彫ったものもある。一部例外的に手や短剣を浮彫した石像がある。

最初の遺跡から約1km下ったジャングルの中に、石像群（7体の石像、2体は倒れている）とメンヒルが東西に並んでいる。その中心に第1形態の石像（像高162cm、幅70cm）があり、これは石像群の中で最も中心的



図30 第2石像群（ビハタ村、1991年賈撮影）

な存在である。その左右に第2形態の石像がある。それぞれの石像とメンヒルが東西に並んでおり、正面は北を向いている。石像のうちの1つは、一般的なニアスの彫刻とはかけ離れた形式である。

第2遺跡の石像は東西に並んで向かい合うように配置されている。第1遺跡と第2遺跡を村の両入口と見るには、両遺跡の距離が離れすぎているため、それぞれの墓地、あるいは宗教的な聖地と見るのが妥当であろう。そしてニアスの巨石広場を介して類推すれば、本来は石像の周辺一帯に村があった可能性が高い。本稿では、ニアスの石像を2つの形態に分類したが、基本的に両者は同じ様式のもので、単に身分や神格の違いを示すためのものである。全ての石像が彫刻的に優れ、その制作には専門的な石工や鉄器を使う集団の存在を考えなければならない。石工集団を率いており、多数の人を動員することができたのは、石像を制作した当時、すでに社会の階層分化があったと考えられる。

## おわりに

ニース人の基層文化はインドよりオーストロネシア語族、そして東南アジアの基層文化との共通要素が多い。自然人類学の研究においても、ニース人は東南アジアの多くの民族との親縁性が認められている。巨石遺構に関してはニース島の独自性が認められるが、これはニース島が最近まで孤立していたことがその原因と考えられる。

ニース島のように今も生きる巨石文化を持つところは、スラウェシ島のトラジャ、スンバ島などである。その中でもニース島とスンバ島とは、その共通性が顕著である<sup>(注17)</sup>。その共通性の例として、古い村は高地に位置し、首狩り風習と身分階層があり、村の巨石広場には祖先崇拜のための慣習家屋、メンヒルやドルメンなどの巨石遺構があり、家畜を生け贄に捧げる勲功などがある。

世界の原始石像は、メンヒル形の石像とマッシブ形の石像に大別することができる。メンヒル形の代表的な石像は、イースター島のモアイ像や中部スラウェシの石像群である。マッシブ形の代表的な石像はスマトラ島のパセマ高原の石像群である。マッシブな石像とは、ズングリとしていると同時にどっしりと重みのある彫刻を指し、いわばひと塊の彫刻といった印象を与える場合が多い<sup>(注18)</sup>が、パセマ高原の石像はまさにその典型を示すものである。

つまり、ニース島のアドゥは祖先崇拜として関連して生まれたものである。現在、ニース島彫刻の個々の編年を決める有力な手掛かりはないが、アドゥの始原は、オーストロネシア語族と関連する可能性が高い。そして、石像制作は金属道具を想定すれば、金属時代以降から出現したとみるのが妥当であろう。

今までの研究では、ニース島のドルメンは単なる巨石記念物であると指摘があった<sup>(注19)</sup>。確かに、バウォマタルオ村のドルメン、メンヒル、石像などは記念碑の役割が強い。しかし、バウォマタルオ村は、歴史的に古い村ではなく、ニース島の全ての巨石遺構が記念碑であるという根拠はない。

1964年、現地調査をした木村重信も、多くの村で祖先の頭蓋骨をドルメンの下に埋葬したという伝聞を紹介している<sup>(注20)</sup>。筆者は、2016年の調査でゴモのドルメンの下部に2次葬の人骨を多数確認している。したがって、ニアス島の古いドルメンは墳墓で2次葬が行われた可能性が非常に高い。

ハイネ・ゲルデルン<sup>(注21)</sup>は、インドネシアにおける巨石文化の古い波は、新石器時代の紀元前2000～紀元前1500年、巨石広場を特徴として広がったもので古い文化の担い手はオーストロネシア語族であり、ニアス島の巨石複合は古い波の文化要素を多く持っていると言う<sup>(注21)</sup>。しかし、ニアス島の支石墓と石像が新石器時代までさかのぼる根拠がない。

ニアス人がゴモ高原地帯から南北に波及したという伝承はニアス各地に残っている<sup>(注22)</sup>。また、ゴモの遺跡に残っているメンヒル、ドルメン、石像などは、南・北ニアスの石造遺物の原型と考えられる。ただし石像と木像のどちらが先に出現したかという問題については、ニアス人の祖先が船に乗って海を渡ったことを想定すると、最も古い形態は小型の木像（アドゥ）というのが自然的な解釈で、それが後にニアスの独自の石像の形式で展開したと思われる<sup>(注23)</sup>。ニアス島の巨石文化の始原は、少なくともスマトラ島のパセマ高原の巨石文化（紀元前4～紀元前5世紀以降）とほぼ同時期であった可能性が高いと考えられる<sup>(注24)</sup>。

（注1）行政区域上、ニアス島は、グヌン・シトリ市、ニアス、北部ニアス、西部ニアス、南部ニアスの5つの地域に分かれ、その中に32の行政郡がある。島の面積は4771km<sup>2</sup>、長さ120km、幅440kmである。650の村に約90万人が住み、東南のバトゥ諸島の島民もニアス人（Ono Niha）に属する。

（注2）Roxana Waterson, (2009), The Living House: An Anthropology of Architecture in South-East Asia, Singapore, TUTTLE PUBLISHING

（注3）ニアス人は、文化的に北部、中部、南部の3つの地域に分けられる。例えば、北部、中部、南部の地域では、家屋の形態、村の構造、言語、巨石遺構などの相違点が認められている。本稿ではニアス島の現在の行政区域に従わず、従来の北部ニアス、中部ニアス、南部ニアスと地域を分けること

にする。

(注4) Lucas Partanda Koestoro & Ketut Wirdnyana, (2015), Megalithic Traditions in Nisa Island, North Sumatra Heritage Series No.0105

(注5) Nata'alui Duha, (2012), OMO NIHA - perahu darat di pulau bergoyang, Indonesia, Museum Pusaka Nias

(注6) Feldman, J. A. (1977), The Architecture of Nias, Indonesia, with Special Reference to Bawomataluo Village, Ph.D. thesis, Columbia.

(注7) 「臍」はオーストロネシア語族において古代宇宙観の重要な概念である。あらゆる力は臍 (pusat) から生まれ、人間だけではなく、住居、村、王国、宇宙もそれぞれ臍を持ち、生命の中心、力の根源、森羅万象の起源を臍と信じている。この臍から「生命の力」(Semang)、精霊 (精神、Semangat) が生まれ、家屋の中心は「臍柱」(Cholocholo) で、村、王国、宇宙の中心は臍石だという。イースター島のハンガ・キヒに「世界のへそ石」がある。

(注8) 南ニアスの人々にとって首長家と共に重要な建物がオモ・バレである。オモ・バレは慣習法の違反や紛争の解決を議論する裁判所と祖先神を祭るは祠堂という2つの機能を持っていた。オモ・バレは天界のロワランギと下界のラトゥレ・ダノと関係があり、天上界と地下界、貴族と平民、男性と女性を象徴的に統合した司祭が管轄する村の根本を中心とする小宇宙である。(Suzuki, P. 1959, The Religious System and Culture of Nias, Indonesia, The Hague: Excelsior)

(注9) 勲功祭宴は雲南省、東南アジア、オセアニアを中心に見ることができるボトラッチ型の祭宴で、巨石文化が存在する地域で行われている。特にボルネオ島のカラビットやサラワクのイリアウ祭、ナガ人の祭宴が有名で、共同体内の個人の地位、威信、功績は祭宴の盛大さに基づいている。ニアスでのオワサは貴族が自分の地位を世襲する過程で、父親の葬礼を伴う儀礼で、盛大な祭宴と巨石記念物を築造するので天文学的な費用がかかる。

(注10) ニアスの伝承によれば、オサオサという石像は、森に棲む精霊ベラ (Bera) が乗る鹿の顔をしている想像上の動物と伝わる。精霊ベラは人間の姿と類似する生き物で、大樹の上に棲む。ゴウェ・ニラレ (Gowe Nilare) 貴族の女性が客の歓迎舞を踊る石製の円卓で、この踊りは鷹が空を飛ぶ様子を

表し、タリ・マヨ (Tali Mayo) と言う。首狩りを行った後、敵の首をゴウェ・ニラレの下に埋葬する。

(注11) Feldman、前掲書

(注12) 佐和隆研編、『インドネシアの遺跡と美術』、(日本放送出版協会、1943年)

(注13) Achim Sibeth& Bruce W. Carpenter, (2013), Nias Sculpture, Red and White Publishing, Indonesia

(注14) ベクとは例外的にひどい状態で殺された人々の魂を指す。

(注15) 賈鍾壽・木村重信編著、『韓国石像の源流を探る』(ブック・コリア、2010年)

(注16) 木村重信、『巨石人像 (モアイ) を追って—南太平洋調査の旅』、(NHK ブックス、1986年)

(注17) 拙論、「ニアスの巨石文化」、(『先史と古代』第21号、2004年)

(注18) 小川光暘、『黒潮に乗ってきた古代文化』、(NHK ブックス、1990年)

(注19) 江上幹幸、「インドネシアのドルメン」、(『アジアの巨石文化—ドルメン支石墓考—』、六興出版、1990年)

(注20) 木村重信、前掲書

(注21) Heine Geldern, Robert, (1945).

Prehistoric Research in the Netherlands Indies, in Science and Scientists in the Netherlands Indies. (Eds.) Honig and F. Verdoor. New York

(注22) Beatty, A. (1992) *Society and Exchange in Nias*, Clarendon Press

(注23) 拙論、「ニアス島の巨石文化」(『季刊韓国の考古学』37、2018年、韓国語)

(注24) 拙論、「神秘の島ニアスの巨石文化」(『環太平洋学文化』第33号、2018年)

※2016年、2017年、筆者のニアス島の現地調査においては、プサカ・ニアス博物館 (Museum Pusaka Nias=MPN) を設立したパスタ・ヨハネス (Pastor Johannes M. Hammerle) 神父、同博物館のナタアルイ (Nata'alui Duha) 館長に多大な協力をいただいたことを心から感謝する。